

# 長編篇

## —— 映画文学人生論

- 0811) 泡鳴五部作 岩野泡鳴 (1920)  
0821) 死の影の下に 中村真一郎(1925)  
0831) 青年の環 野間宏 (1930)  
0841) 豊饒の海 三島由紀夫 (1940)  
0851) おかしな二人組 大江健三郎 (2000-2005)

長編小説は長く、人生は短し

芸術は長く、人生は短し (Ars Longa, vita brevis)。

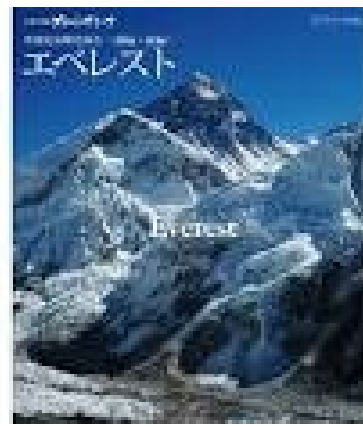
芸術の鑑賞に要する時間は音楽、絵画、彫刻、俳句、短歌、短編小説、映画、写真なら一分から二時間程度。中編小説も二、三日あれば読める。

長編小説となると、そうはいかない。トルストイの『戦争と平和』やプルーストの『失われた時をもとめて』を読もうとしても、まごまごしていると、一ヶ月たっても読みきれないだろう。

日本文学にも『戦争と平和』や『失われた時をもとめて』に匹敵するような長編小説がある。たとえば、次のような作品があることを私は以前から知っていたが、これまではおそれをなして、敬遠していた。

泡鳴五部作	岩野泡鳴
死の影の下に	中村真一郎
青年の環	野間宏
豊饒の海	三島由紀夫
おかしな二人組	大江健三郎

今回、これらの作品をわざわざ読む気になったのは、「なぜ山に登るのか」と聞かれた登山家が「そこに山があるからだ」と答えたときの心理に通じるものがあるかもしれない。「そこに長編小説があるからだ」。



## 長編篇

映画文学人生論

四百字詰原稿用紙の枚数でいえば、だいたい三千枚から八千枚——中里介山『大菩薩峠』の一万五千枚ほどではないとはいえ、アルプスやヒマラヤの三千—八千メートル級の高山に匹敵する。

内容が理解できるかどうかはともかくとして、このような長編小説を読了すると、アルプスやヒマラヤの高峰へ登頂に成功したような歓喜をおぼえる。私は短編小説を読むほうが好きだが、長編小説の作者はよほどの持続力、構成力、筆力に恵まれているにちがいないと思う。

岩野泡鳴、中村真一郎、野間宏、三島由紀夫、大江健三郎——これら五人の作家の才能はおそろべきもので、人間業とは思えない。しかし、本は二度以上読まないと読書ではない、もう一度読めなどと言われたら、もういい、勘弁してくれと、逃げだしたくなる。

なぜだろうか。それは、長編小説の場合、作者の言語表現能力と読者の受容能力との開きが拡大するためではないかと思われる。部分的には面白いと思う読者でも、全体として読後の感動からはほど遠い。なにかへんだ。どこかがおかしい。だが、それを説明するのは難しい。現在の私の読解力では、かなしいかな、それが現実だ。

しかし、山はそこに聳えているが故に尊い。長編小説もまた然り。登頂できてよかった。

荒海や佐渡によこたふ天河 芭蕉